

大学での講義における一枚ポートフォリオ評価法の活用

—「考えたこと」を書く意義—

小 山 英 恵*

(キーワード：OPPA, ポートフォリオ評価法, 大学, 考えたこと, 目標にとらわれない評価)

はじめに

筆者は、2013年度から2016年度に、大学における担当授業科目において一枚ポートフォリオ評価法（One Page Portfolio Assessment (OPPA)）を活用した実践を行った。本稿は、その実践を報告するとともに、事例検討を行うことによって、その意義と課題を明らかにすることを目的とする。

近年、教育政策においてポートフォリオ評価法の導入が推進されている。その契機は、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会『児童生徒の学習評価の在り方について（報告）』（2010年3月24日）において、学習状況の把握、および成果や課題を示すためにポートフォリオを活用することが推奨されたことにみることができる。2017年改訂の学習指導要領に向けた中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』（2016年12月21日）においても、「一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行い、子供たちの資質・能力がどのように伸びているかを、例えば、日々の記録やポートフォリオなどを通じて、子供たち自身が把握できるようにしていくことも考えられる」と明示されている。また、学士課程においても、中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて（答申）」（2008年12月24日）において、多面的な評価のために学習ポートフォリオを活用することが推奨されている。このように初等中等教育および高等教育におけるポートフォリオ評価法の活用が推奨されるなかで、とくに教員養成課程においてポートフォリオ評価法を活用することは、学生の評価の問題のみならず、将来ポートフォリオ評価法を実践する側になるために体験を通してこの評価法を理解するという意義をもつと考えられる。さて、本稿が取り上げる一枚ポートフォリオ評価法（以下OPPA）は、堀哲夫氏が開発したものである。一枚ポートフォリオ（One Page Portfolio（以下OPP））と呼ばれる一枚の用紙を、一つの単位（あるいは一つの学習のま

とまり）において使用する。OPPに、学習者が学習の履歴を記録していく。学習者自身がその全体を自己評価するとともに、教師は学習者の記述から自らの授業の評価と改善を行うものである。一つの単元の学習履歴を一枚の用紙で振り返ることができる点に、OPPAの大きな特徴がある。

一般に、OPPAは初等中等教育において活用されており、その実践報告が多くある¹。高等教育における実践としては、堀氏自身による研究報告がある²。この研究において、堀氏は、大学の授業改善のために一枚ポートフォリオ評価法を活用している。堀氏は、OPPAのもつ他の評価と大きく異なる特徴として、「もっとも重要な事項を簡潔に要約する資質・能力」³を学習者に育成しようとしていることを挙げたうえで、大学におけるOPPAの活用が、学生が授業内容の最重要事項は何かを考えながら受講するようになる効果があること、また教師にとって授業評価が可能なることを明らかにしている。一方で、大学においては講義時間が長いために、最も重要なことが不明確になる場合があることや、学生の講義に臨む姿勢が不適切な場合は効果をあげることができないこと、また受講生が多い場合はOPPシートの配布方法に工夫がいること、といった課題も示している。

筆者がOPPAに着目したきっかけは、毎回の授業においてふりかえりシートを使用することの煩雑さや、授業の最後に学生たちに講義全体をまとめてふりかえらせることの困難さを実感したことにある。学生の理解度をみとり、形成的評価を行うこと、また学生に省察を行わせることの必要性を感じてふりかえりシートを使用していたのであるが、こういった問題を抱えていた。そこで、OPPAを活用し始めた。しかしながら、筆者は、堀氏の提唱するOPPAの方法をそのまま実践したわけではない。教員養成課程のなかで、とくに音楽科教育に関連する授業の性質に即して若干の変更を加えて活用している。そのもっとも大きな点は、毎回の授業の最後に、学生が自由に「考えたこと」を書かせる点にある。

堀氏によるOPPにおいては、素朴概念から科学的概念

*鳴門教育大学芸術・健康系教育部

への変容のプロセスを可視化するという目的が中核に置かれているために、毎回の授業の最後（学習履歴）に「授業で一番大切なこと」を書かせる。つまり、堀氏のOPPAにおいては、当該授業のねらいの理解度が一番の問題とされており、目標に準拠した評価がその中核にある。それに対して、筆者のOPPにおいては、毎回の授業の最後に、学んだことに加えて、学んだことをもとに学生が自由に考えたことを書かせている。目標に準拠した評価（学んだこと）に加えて、より積極的に、目標にとらわれない評価（自由に考えたこと）を取り入れている⁴。本稿では、このことが生むOPPAの新たな可能性にとくに注目したい。以下、堀氏によるOPPAの理論を確認、検討したうえで、筆者によるOPPA実践事例を検討していく。

1. OPPOの理論

1. 1. OPPOとは何か

まず、OPPOの理論について検討していこう⁵。堀氏によれば、OPPOとは、「教師のねらいとする授業の成果を、学習者が一枚の用紙（OPPシート）の中に授業前・中・後の学習履歴として記録し、その全体を学習者自身に自己評価させる方法」⁶と定義される。ここに、堀氏によるOPPOが、教師が設定した目標に準拠した評価を中核とするものであることが明らかである。

OPPOの基本的な構造は、「単元名タイトル」「学習前・後の本質的な問い」「学習履歴」「学習後の自己評価」からなる。図1は、OPPシートの基本的構成要素と骨子である。主な流れは次のようなものである。まず教師は、一つの単元をもとにしてOPPを作成する。学習者は、教師の設定した「単元を貫く本質的な問い」に対する応えを、まず学習前に書く。学習が開始すれば、学習者は毎時間の授業後に「学習履歴」として学習記録を書く。教師は、学習者が記入した「学習履歴」に対してコメントを書いたり、授業の評価と改善を行ったりする。これを繰り返す。学習後、学習者は、ふたたび「単元を貫く本質的な問い」に対する応えを書くとともに、学習内容全体をふりかえり、自己評価する。

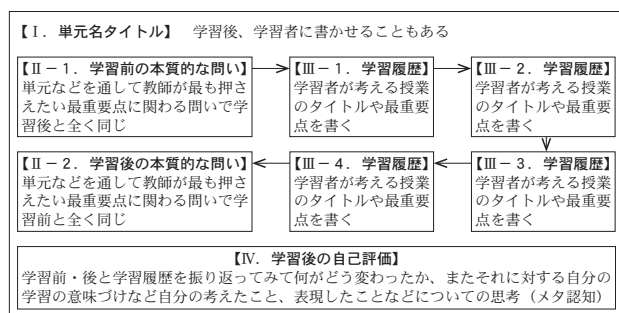


図1 OPPOシートの基本的構成要素と骨子
【出典】堀, 2013年, p.23をもとに筆者作成。

教師が設定する「単元を貫く本質的な問い」は、単元の本質に関わる内容でなければならないとされる。また、「学習履歴」には、その「授業の一番大切なこと」を書くことになっている。

1. 2. OPPOの理論とOPPの構造

このようなOPPの構造を形づくる主な基盤は、以下の2点に整理できる。1点目は、構成主義の学習観である。構成主義の学習観とは、学習を『既知』と『未知』との葛藤や調節という相互作用を経ながら、『既知』なるものが組み替えられていくこと⁷と捉えるものである。したがって、そこでは、学習者の素朴概念がどのように科学的概念に変容していくのかが重要となる。この変容過程（いわゆるブラックボックス）における、「内化・内省・外化」⁸をみえるようにするしかけが、まさにこのOPPにあるといえる。

2点目は、堀氏による学力モデルである。OPPOの背後にある学力モデル（図2）は、素朴概念から科学的概念への変容、自己評価によるメタ認知能力の育成、思考力・判断力・表現力の育成の3つの要素からなる。換言すれば、教科書の内容の理解（科学的概念の獲得）と資質・能力の育成（メタ認知能力、思考力・判断力・表現力の育成）が目指されている。OPPOはこれらの育成を促すと同時にその形成過程を示すものとなっている。「単元を貫く本質的な問い」に対する、学習前・後の応えは、素朴概念から科学的概念への変容を示すことになる。そのプロセスは、「学習履歴」に記録される。また、本質的な問いの変容による自己評価、「学習履歴」において思考や認知過程の内化・内省・外化を確認する自己評価、全体を通じた学習過程や変容による自己評価によって、メタ認知能力が育成されるという。さらに、毎回の授業後に、「授業で一番大切なこと」を書くという作業は、思考力・判断力・表現力を必要とするものであるとされる。その意味において、この「学習履歴」を書くことは、一種のパフォーマンス評価であるという。

また、OPPの構造は、OPPOがもつ診断的・形成的・

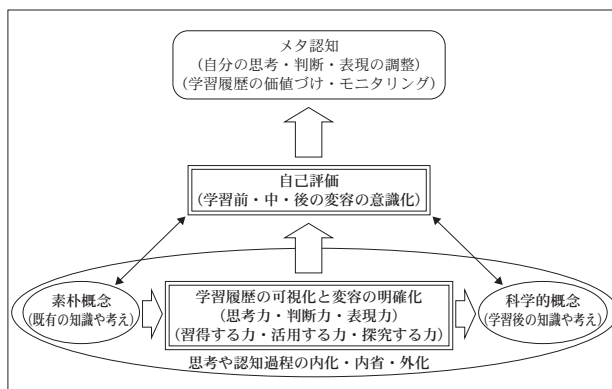


図2 OPPOの学力モデル
【出典】堀, 2013年, p.56。

総括的評価の機能を示すものでもあるという。すなわち、「学習前の問い」は診断的評価であり、「学習履歴」は形成的評価であり、「学習後の問い」および「学習後の自己評価」は総括的評価となるのである。このような OPP シートの作成は、授業の構成、実施、改善を含めた授業のグランドデザインとしての意味をもつとされている。

そして、なにより OPPA の核心は、単元全体の内容に関して一枚のシートにおさめることにある。一枚であることにより、単元全体がみわたせる。そのことによって、自己評価やふりかえりが容易となり、変容過程が明らかになるとされる。

ところで、筆者は、このような OPPA が、いわゆる「学習としての評価」の意味をもつと考えている。「学習としての評価」とは、それ自体が学習経験を意味する評価のことである。それは、メタ認知能力の育成のために、学習者自身による学習プロセスのふりかえりといった評価活動を学習の場として位置づけ、学習者を評価に参加させていくものであり、教師による評価と学習者による評価の結合である⁹。学習者が評価に参加する点、また評価の機能のみならず、そこにメタ認知能力や思考力・判断力・表現力の育成という学習としての機能を積極的に意味付ける点において、OPPA は「学習としての評価」として捉えられる。

また、筆者は、「学習としての評価」である OPPA が、同時に近年注目されるアクティブラーニングとして捉えられると考えている。溝上は、アクティブラーニングを、「一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」¹⁰と定義している。ここで溝上が強調する点は、教授パラダイムから学習パラダイムへの転換と、活動（書くなど）するだけではなく、知識と絡み合わせながら認知機能を働かせること（それを外化させること）である。ここで「認知プロセス」とは、「知覚・記憶・言語、思考（論理的／批判的／創造的思考、推論、判断、意思決定、問題解決など）といった心的表象としての情報処理プロセス」¹¹であるとされる。「授業で一番大切なこと」について思考し、判断し（認知プロセス）、表現する（書く・外化）ことを求める OPP の「学習履歴」は、まさにアクティブラーニングといえるであろう。

1. 3. ポートフォリオ評価法との相違

ここで、OPPA と、ポートフォリオ評価法との相違点を明らかにしておこう。ポートフォリオ評価法とは、「ポートフォリオづくりを通して、子どもの学習に対する自己評価を促すとともに、教師も子どもの学習活動と自らの教育活動を評価するアプローチ」であり、ここでポートフォリオとは、「子どもの作品、自己評価の記録、

教師の指導と評価の記録などを、系統的に蓄積していくもの」である¹²。堀氏は、OPPA の理論的骨子の一つとして、学習の過程や変容を明確にするポートフォリオ評価法があることを明記している¹³。また、この定義から、子どもの自己評価と教師の教育活動を評価する点も、OPPA が受け継いでいることが明らかである。

他方で、堀氏はポートフォリオ評価法のもつ2つの課題を挙げている。1つは、一般にポートフォリオ評価法が、学習前の既有的知識や考えが明確でないままに行われている点である。これでは、学習の成果が不明確になってしまうことを指摘する。このような指摘からは、OPPA が素朴概念から科学的概念への変容を強く意識して作られたものであることがうかがえる。OPPA では、学習前と学習後に同じ問いをすることによって、この点を克服している。

もう1つの課題は、多くの作品や記録等を長期間蓄積していくポートフォリオは、適切な情報の選択が難しいという点である。OPPA では、必要最小限の情報を最大限に活用するために、「授業の一番大切なこと」だけを取り上げているという。その情報は、さらに一枚の用紙に集約されることによって、構造化され、学習過程が明確になっていくとされる。

1. 4. 筆者による OPPA の独自性

筆者の OPPA 実践は、以上の OPPA の考えや、OPP の枠組みの基本的な部分を受け継いでいる。一方で、既述のように若干の変更を加えている。その変更とは、「学習履歴」欄において、「授業で一番大切なこと」を書かせるのではなく、「授業で学んだこと」と学んだことから「考えたこと」を書かせる点である。

「授業で一番大切なこと」ではなく「授業で学んだこと」を書かせる理由としては、90分という長さの講義内容について大切なことが一つとは限らないこと、またそれらをまとめる力を育成するというねらいが挙げられる。ここには、堀氏の提唱するように思考、判断してまとめるという能力の育成をめざしていることがある。しかし、「授業で学んだこと」と、学んだことから「考えたこと」を書かせるより本質的な理由は、以下の2点にある。1つは、筆者が音楽科教育に関連する授業を担当していることに関わるものである。音楽科教育に関わる授業は、共通の教育内容に加えて、とくに音楽自体に関わる側面においては学生一人ひとりが感性を働かせながら学んでいく必要がある。そこで、学生一人ひとりのこれまでの生活経験や音楽経験、他の講義での学び等と、授業における学習内容との結びつきを積極的に考えさせ、書かせたかったことがある。もう1つは、教員養成のための授業として、教育内容や方法を理解するだけではなく、教師としての観（音楽教育観、音楽観、教師像など）を育成することをねらいとしていることである。このことは、

とくに大学院の授業科目における OPP に関わっている。

これらの相違点は、長年理科教育研究に携わってこられた堀氏による OPPA の意図の中核が、素朴概念から科学的概念への認知プロセスを明らかにすることにあるのに対して、筆者の OPPA は個々の学習者の感性を働かせることが求められる音楽科教育において活用したものであるという、背景の違いに因るものといえる。

2. OPPA の実践

2. 1. OPPA の実施概要

筆者は、2013 年度から 2016 年度まで、学校教育学部における「中等音楽科授業論」、「初等音楽科教育論」、および大学院学校教育研究科における「音楽科授業研究」の授業において継続して一枚ポートフォリオ評価法を活用している。いずれの授業においても、15 回の授業で一枚の OPP を用い、開講時に学習前の問いについて書いてもらう。また、毎回の授業の終わりに 5 分程度の時間を取って「学習の履歴」を書いてもらう。ただし、5 分では時間が足りずに授業時間を過ぎて休憩時間に入っても書き続ける熱心な学生も必ずいる。そして、15 回目の最終回に学習後の問いおよび全体のふりかえり（自己評価）を書いてもらうようにしている。OPP の基本的な形式は全て同じで、資料 1 のとおりである。ふりかえりを促す文言等の詳細は、年度ごとに若干の修正を加えている。

初回の授業において、OPPA の理論的背景が構成主義の学習観にあること、その中核的なねらいが形成的評価および自己評価、また目標にとらわれない評価にあること等を学生に説明している。OPPA の理論や意図を学習者に説明する点は、初等中等教育における OPPA の活用と異なる点であろう。筆者の実践においては、教員養成課程の授業であることを意識し、学生たちが将来教師になったときに OPPA を活用する立場になることを考慮してこのような説明を行っている。また、OPP の書き方については、とくに「学習の履歴」の欄の書き方について、①学んだことと、考えたことを書くこと、②学んだことについては、90 分という長い時間で学んだことをこの小さなスペースにどのようにまとめて書くのかをしっかりと考えて書くこと、③考えたことについては、学んだことをもとに自分なりに考えたことを書くこと、を指示している。②については、高度な思考力を必要とすることを強調している。

以上のような実施の仕方は、いずれの授業においても共通している。ただし、言うまでもなく学習前・後の問いは授業によって異なっている。また、それぞれの授業において、受講人数が 10 人前後であったり、100 人以上であったり、さらに学年や授業内容も異なるため、OPPA の実施の仕方は若干異なっている。以下、OPPA の効果が実感されたいくつかの事例を検討していこう。

資料 1 筆者による OPP の形式

「授業科目名」 一枚ポートフォリオ (OPP)		
コース _____	番号 _____	氏名 _____
○学習前「 _____ 」		
○学習の履歴		
回	テーマ	授業で学んだこと・考えたこと
1		
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		

9		
10		
11		
12		
13		
14		

○学習後「 _____ 」

○この授業での学習を振り返って何を学びましたか？ また○○○○○に関する考えがどのように変わりましたか？ 自由に書いて下さい。

2. 2. 認識の変容とその自覚がみられる事例

まず、学校教育学部の授業、「中等音楽科授業論」における OPPA の事例である。この授業は、小学校教育専修・中学校教育専修（音楽科教育コース）の学部3年生の必修科目であり、受講生10人前後の少人数の授業である。授業の概要は表1のとおりである。音楽科の授業づくりの基本については、学部2年生必修の、「初等音楽科教育論」で学習している。この授業では、中等音楽科教育の内容について学習するだけでなく、「初等音楽科教育論」で学習した基礎をふまえたうえで、音楽科の授業づくりに関する理論的理解と実践的な力をより深めていくことを目的としている。

表1 「中等音楽科授業論」授業概要

<p>■授業の目的：音楽科の授業づくりに必要な基礎的な能力を育成することを目的とする。</p> <p>■到達目標：</p> <p>①初等音楽科教育論において学習した音楽科の目標・内容、指導方法、評価についての理解を、音楽のもつ特性と授業づくりの理論的な視点をよりどころとしてより深めることができる。</p> <p>②講義内容をふまえたうえで音楽科の学習指導案を作成し、模擬授業を実践することができる。</p> <p>■授業計画：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 音楽科の授業とは 3. 音楽のもつ特性とはなにか 4. 音楽科の学力とは 5, 6. 音楽学習の評価とは 7. 子どもたちが音楽を探究する題材をどう構想するか 8. 音楽学習の教材を考える 9, 10. 音楽授業における教授行為・学習形態を考える 11. 学習指導案作成 12～14. 模擬授業と授業検討（第11回までの講義で学んだ理論の実践） 15. まとめ

OPPA の活用の仕方は、先述のとおりである。初回の授業で OPPA についての説明を行った後で、学習前の問いの欄に記入してもらい、以後毎回の授業の終わりに OPP を配布し、書き終わったら提出してもらうことを繰り返す。15 回目の最終回の授業において、学習後の問いに答えてもらい、全体のふりかえりを書いてもらう。授業の進行によっては、学習後の問いと全体のふりかえりを授業後の課題とし、後日提出してもらうことも多い。

この授業では、学習前・後の問いとして、「音楽科の授業づくりで大切なことを書いて下さい」という問いを設定した。この授業における OPPA の活用において、筆者がその効果を感じる点は、学生の認識の変容がみてとれることにある。以下は、学生 A の OPP における学習前・後の問いと全体のふりかえりの記述である。

○学習前「音楽科の授業づくりで大切なことを書いて下さい」

「授業づくりでは、まず音楽にたくさんふれることが大切だと思う。例えば、声楽の授業では、歌の意味、内容をとらえることも大事だが、たくさん歌うことの方が大切だと思う。また、授業を構成する上で、全体⇒部分⇒全体のとらえ直しという流れで授業をつくるのが大切だと思う。」

○学習後「音楽科の授業づくりで大切なことを書いてください」

「子どもたちにどのような力をつけたいかを明確にし、その目標を達成するためには、どのような学習計画を立てていかなければいけないかを考えることが大切だと学んだ。また、目標と学習内容が合致していても、それが本当にその音楽に合っているのかを確かめることが必要であることも知った。……子どもたち主体に考え、音楽の魅力にせまられるような授業づくりが大切であると思った。」

○「中等音楽科授業論」において何を学びましたか？

また音楽科の授業づくりに関する考えがどのように変わりましたか？ 自由に書いてください。

「子どもたち自身で音楽を探究するためには、私たちはどのような手立てをうつのかを考えなければいけないと学んだ。私たちは、小さい頃から音楽に関わっているので、ある程度知識や技術があるが子どもたちは様々である。授業をつくるときには、子どもの姿を常に考えながら、していかないといけないという考えに変わった。だから、子どもの実態をしっかり見て、教材解釈をしっかりし、音楽の魅力を伝えることができ、子ども自身で感じられるような授業づくりをしていきたいと思った。」

まず、学習前の記述からは、音楽科の授業において大切なことを自分なりに、また断片的に捉えていることがわかる。一方、学習後の記述においては、音楽科の授業づくりについて、主体的な音楽活動の重要性や音楽の特質、また授業論、発達論等を、自分自身の経験に照らしながら理解していることがみてとれる。また、音楽科の授業づくりに関する認識の変容と学習者自身によるその自覚をみとることができる。ここには、教育内容の理解と、メタ認知能力、思考、判断、表現の力の伸長をみることができよう。また、学生のふりかえりの記述は、「学習の履歴」との関連がみられることが多い。したがって、授業全体の的確なふりかえりを可能にしているのは、15 回の授業全体の「学習の履歴」を一枚のシートによって見渡せることにあると考えられる。このような OPPA の効果は堀氏の主張するところである。

ただし、このような適切な認識の変容を示す記述が全ての学生にみられるわけではない。多くの学生に認識の変容がみられるものの、一部には理解が深まらず、場当

たりの考えを書く学生もいる。このような学生間の理解の程度の差は、筆者自身の授業実践改善の契機となっている。

2. 3. 学び合いと講義内容決定への参加を実現する事例

本節および次節においては、筆者の OPPA 実践の独自性である、学習履歴に「考えたこと」を書かせることの効果に着目して事例を検討していこう。

まず、「初等音楽科教育論」における OPPA 事例である。授業概要は、表 2 のとおりであり、初等音楽科教育の基本的な内容を理解することを目的としている。この授業は、学部 2 年生の必修の授業であり、受講生が 120 人前後という大人数の授業である。そのため、堀氏の先行研究において指摘されていたように、まず OPP の配布方法に苦慮した。現在は、専攻コースごとに OPP を提出する封筒を作り、授業の終わりにその封筒を並べ、「すべての人が一気にとりに来たら混雑することは容易に想像できる。たとえば近くに同じコースの人がいたらそのうちの一人がとりにくる、周りに自分しかないないなと思ったらさっと取りにくるなど、周りの状況をよく把握して、頭を働かせて行動してください」と指示を出している。すると、学生も臨機応変に動くことができ、短時間での OPP 返却が可能になっている。また、このようにすることで、教師として必要な、状況を判断し自身で行動できる力を引き出したいと考えている。書き終わったら、各自で所属するコースの封筒へ提出してもらおう。

表 2 「初等音楽科教育論」授業概要

■授業の目的：小学校での音楽教育に必要な基礎的な能力を育成することを目的とする。

■到達目標：

- ①小学校音楽科の目的、目標、内容、指導方法、評価について理解できる。
- ②講義内容をふまえたうえで、学習指導案を作成し、模擬授業を実践することができる。

■授業計画：

1. オリエンテーション
2. 小学校音楽科の目標、指導内容の構成
3. 音楽科の学力と評価
4. 学習指導計画
- 5, 6. 「歌唱」の内容と方法
7. 「器楽」の内容と方法
8. 「音楽づくり」の内容と方法
- 9, 10. 「鑑賞」の内容と方法
- 11, 12. 学習指導案作成
- 13, 14. 模擬授業と授業検討
15. まとめ

「初等音楽科教育論」における OPPA においても、認識の変容をみとることができる。また、毎回の「学習の履歴」の記述によって、学生の理解度や関心なども把握することができる。ここで特記したいことは、この授業

においてのみ実施している OPPA の活用法である。

その活用法とは、毎週、学生たちが書いた「学習の履歴」の記述のいくつかを選び、次の授業の最初にその記述を紹介することで、全体でその記述を共有し、教師がコメントをする、という方法である。紹介する「学習の履歴」は、前回の授業内容の理解をより深めると考えられるものや、授業内容をさらに発展させるものを選ぶようにしている。少人数の授業と異なり、100 人以上の受講生がいるこの授業では、一人ひとりの学生とのコミュニケーションをはかることが難しい。かといって、毎週 100 人以上の学生にコメントを付す余裕もない。そこで、学生の記述をこちらがしっかり受け止めていることを伝えるためにも、このような活用の仕方を取り入れてきた。

このように OPPA を活用するなかで、2 つの新たな効果を実感するにいたった。その 1 つは、学生どうしの学び合いの実現である。それは、筆者が予期していなかった事態である。ある学生の記述内容を授業内で紹介することによって、その内容を受けて新たに「考えたこと」を書く学生が出てきたのである。自分が書いた内容を受けて、他者がさらなる学びを獲得した経験について、学生 B は、「嬉しかったし、学び合っているなと感じた」と記述していた。この学生 B の言葉のように、まさに「学び合い」が、各自が「考えたこと」を書かせる OPPA の効果として生まれてきたのである。

この学び合いは、毎回ではないが、たびたび起こっている。2 つの例を紹介しよう。二部合唱の教材曲を用いて旋律の重なるの味わいを学習する音楽科の授業について学習した際に、学生 C は、「学習の履歴」に次のように記述した。

「最後、二部合唱をしてみると、それまで奥行きがなかった合唱に、奥行きが生まれたと思う。音を色のイメージで考えると、一部合唱の時は 1～3 色ぐらいに感じたが、もっともっとたくさんの色を音から感じた。」

次週の授業において、この記述を紹介すると、学生 D はその日の講義のなかで取り上げた教材曲ボディ・パークッションの「手拍子の花束」(山田俊之作曲)を演奏した経験を次のように記述した。

「これが『先週のポートフォリオ』に紹介されていた『たくさんの色を感じる』ということなのかな、と思いました。『手拍子の花束』には歌詞はありませんでしたが、色んな音がいろとりどりの色にきこえて、とても面白かったです。」

また、ある回の講義において、教材曲としてわらべうたを取り上げる音楽科の授業について学習した。その際「考えたこと」として、学生 E は次のように記述した。

「童謡以外の音楽 (J-POP 等) でも知識は身に付くのではないかな。私が小学生の頃、童謡しか学ぶことがな

く面白くないという気持ちによくなった覚えがある。子どもの気を引く効果も最近の音楽には期待できる。」

この学生は、おそらく、わらべうただけではなく、文部省唱歌等を含め教科書に掲載されている楽曲一般に対する批判的見解を述べていると思われる。この記述を紹介した回では、講義内容に歌唱共通教材の学習が入っていたこともあり、次のような「考えたこと」を書く学生 F が出てきた。

「自分も共通教材に違和感があった時がありました。地域によって歌う曲も異なるはずなのにどうして全国共通なのか不思議です。そういうことも色々考えていきたいです。」

通常、「初等音楽科教育論」の内容としては、共通教材を学習する意義を理解することまでを範囲としている。しかしながら、学術的にみれば、共通教材の設定の是非は論争中の問題であり、この問題について深く考えることは重要なことである。この「初等音楽科教育論」の受講者たちは、一人の学生の「考えたこと」をきっかけとして、このような、より深い内容に触れることになったのである。

このことと関連するのが、2つ目の効果である。すなわち、講義内容の決定に学生が参加するということである。一人ひとりの学生が「考えたこと」の記述を翌週の授業で取り上げることによって、教師側は、その記述に関連する2,3の新たなトピックを学生に話すことになる。それは、講義内容を教師が一人で考えていた場合には入ることのなかった内容である。

このように、OPPAの「学習の履歴」において「学んだこと」を書かせることが堀氏のいうように形成的評価となる一方で、「考えたこと」を書かせ、それを講義において取り上げることは、学び合いや講義内容の決定への学生の参加を実現し、新たな学習の広がりを生む。

他方、大人数での講義においてOPPAを使用することの課題もある。それは、一部、「学習の履歴」を書くことにおいて、90分の内容をまとめようとするのを放棄する学生が出てくることである。そのような学生は、「学習の履歴」を一文や一行程度を書くのみであり、OPPを出席確認代わり程度に理解していることが推察される。堀氏の研究においても、大学におけるOPPAの活用では、「講義に臨む姿勢が不適切な場合は効果をあげることができない」ということが指摘されている。筆者の実践においても、この課題は未解決のままである。

「学習としての評価」であるOPPAが、アクティブラーニングとして捉えられることは先に述べたが、このような問題は、高等教育におけるアクティブラーニングが一般的に抱える問題にも通じるものである。松下は、アクティブラーニングは大学授業改革の万能薬ではないとし

たうえで、高等教育におけるアクティブラーニングの問題点の一つとして、「能動的学習をめざす授業のもたらす受動性」を挙げている。能動的な活動が授業において構造化されることによって、学生は活動参加への意思決定がないままに活動することになる。そこに、受動性が生まれるのである¹⁴。このような問題は、OPPAの実践にも当てはまる。学生自身の意思でOPPを書くわけではないからであり、また毎回の授業で「学習の履歴」を書くことがマンネリ化してしまう場合もあるからである。

2. 4. 自己内対話によって「観」を培う事例

最後に、大学院学校教育研究科の少人数での授業、「音楽科授業研究」におけるOPPAの事例である。この授業の概要は、表3のとおりである。先の2事例と比べて、この授業の特色は、大学院の授業ということもあり、到達目標にあるように、音楽科教育に関する内容を理解することだけではなく、自らの視野を広げ、問題意識を深めながら、教師としてよりよい授業を追求する姿勢を育成することを目的としている点にある。

表3 「音楽科授業研究」の授業概要

■目的および主旨：

国内外の音楽教育の理論と実践を学びながら音楽科授業研究における方法と意義について理解を深め、教育現場においてよりよい音楽科授業実践を追求する力を身につけることを目的とする。

■到達目標：

- ①音楽教育における過去の議論を学ぶことにより、音楽科教育に関する自らの視野を広げ、問題意識を深めることができる。
- ②音楽科授業研究の方法と意義について理解することができる。

■授業計画：

1. オリエンテーション
- 2, 3. 何のために音楽を教えるのか
- 4, 5. 子どもの生活と音楽
6. 歌唱教育を考える
7. 学校教育における日本の伝統的な音楽
- 8, 9. 音楽の基礎教育
- 10, 11. 子どもの声に何を聴くか
12. 音楽専門家の主張
- 13, 14. 音楽科の授業をどう追究するか
15. まとめ

このような授業内容に関わって、この授業におけるOPPAの効果として感じられるのは、毎回の「学習の履歴」において「学んだこと」と「考えたこと」を書かせることによって、学生たちが自己内対話を行い、ときに葛藤しながら、音楽観、音楽教育観の変容を自覚していくことである。教師は、そのようなプロセスをみとることができる。以下は、学生Gの「学習の履歴」における3つの記述である。

「音楽を専門として学んできましたが、私自身とても大切なことを忘れかけていたように思いました。この映像を見て、自分が音楽に魅せられたときのことを思い出し、又、彼らが音楽の魅力に気づけたことが本当に嬉しくて、感動しました。いろいろ考えすぎてわからなくなっていました、素直に音楽を楽しみたいし、そういう音楽教育をしたいと思いました」

「先週からのつながりで、素直に音楽を楽しむとは、今日やったようなことなんだとわかりました。1番最初に歌ったときは楽譜に釘付けで、何のためにこれを歌うんやろ？と考えながら歌っていましたが、目を見て歌ったり、ふりつけを考えたり、かえうたを作ったりしているうちに、心が開放されたようになり、難しいことを考えずに思ったことを言えるようになった気がします。こういう状況がつづく、音楽が人々を結びつけるということにもつながっていくのかなと思いました。」

「私も芸術的音楽的な面が大事なのか、本当に心から音楽を楽しむことが大事なのか、悩んだりしましたが、教育における音楽の役割ということを考えたときに、どちらかにかたよることではだめなんだと思いました・・・(中略)・・・私自身ピアノのレッスンの時に『お前の♪はソルフェージュ的には間違っていないが、ワクワクした感じや楽しい感じが伝わってこない』とつい最近言われたばかりでした。この子たちの歌はソルフェージュ的、楽譜上の音としては間違ってるかもしれませんが、改めてきいた時に、子どもたちの生命がとてもつよく感じられました。」

これらの記述には、自らのこれまでの考えを振り返りながら、新たな学びを獲得していく過程が表れている。自分自身の音楽経験や、以前の授業の内容、また、大学における他の授業内容などをふまえながら、授業内容について、自己内対話を行い、知を総合させて理解していく様子が見える。さらにそのことによって、音楽観、音楽教育観といったものを培い、その変容を自覚していることがわかる。このような記述から、学んだことから学生に自由に考えさせることは、学んだことと自分が生きることへの接点をもたせる可能性を生むと考えられる。

おわりに

「学んだこと」とそこから「考えたこと」を記述させる OPPA の特徴は、あくまでまず教師が設定した共通の目標（内容）に準拠した評価があり、そこを起点とした目標にとらわれない評価を含む点にある。したがってそこには、学生一人ひとりに他の受講学生に理解や共感が可能な独自の考えが生起し、学びあいや授業内容を発展させる可能性がひらかれている。また、教師による目標設定があるからこそ、そこから生まれる自己内対話におい

て学生自身に葛藤が生まれると考えられる。ここに、目標に準拠した評価と目標にとらわれない評価を融合する OPPA の意義があるといえよう。一方、OPPA の課題は既述のとおりである。

実のところ、本稿執筆の契機は、学生たちの豊かで魅力的な記述を残しておきたいという思いにあった。筆者は、大学における講義をはじめて日が浅く、講義内容自体については日々反省し、多くの改善の余地のあるものであり、決して公に報告できるようなものではない。しかしながら、この OPPA 実践において、教師のねらいを超えて学生たちに「考えたこと」を書いてもらうことによって学生が様々な可能性を発揮し、学生たちと共に知を創造するとき、学生たちの力を信頼することの喜びを感じる。そこには、かけがえのない人生を生きている多様な可能性をもった一人ひとりの人間として学生をみる学生観が生まれてくるのである。

さらには、講義レジメやノートを何度も見直ししながら真剣に思考して学習内容をまとめ、自分なりの豊かな考えをめぐらせて記述する学生たちをみると、そしてそこに教育観の変容の自覚がみられるとき、OPPA の活用が、一枚の用紙に込められる「厚み」をもった教員養成へつながるのではないかと考えられるのである。

註

- 1 たえば、堀哲夫『一枚ポートフォリオ評価ー子どもの成長が教師に見える 中学校編』日本標準、2006年、堀哲夫『一枚ポートフォリオ評価ー子どもの成長が教師に見える 小学校編』日本標準、2006年など。
- 2 堀哲夫「学習履歴を中心にした大学の授業改善に関する研究ー OPPA を中心にして」『教育実践学研究』山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要 14, pp.64－71, 2009年。
- 3 同上論文, p.67。
- 4 堀氏の OPPA においても、「学習後の自己評価」欄には自分の学習の意味や考えたことなどを書くことになっている。しかし、後述するように堀氏の OPPA の主眼はあくまで素朴概念から科学的概念への変容にある。
- 5 以下、OPPA の理論については、堀哲夫『教育評価の本質を問う一枚ポートフォリオ評価 OPPA ー一枚用紙の可能性』東洋館出版社、2013年にに基づく。
- 6 同上書, p.21。
- 7 田中耕治『教育評価』岩波書店、2008年。
- 8 堀によれば、内化とは「過去の経験や学習による外部情報の吸収」である。内省とは、「既有知識や考えと対比し学習の見通しをもつ」予見的内省、「学習から得た内容や変容を熟考する」学習中の内省、「学習から得

た内容や変容を振り返り熟考する」遡及的内省からなる。外化とは「学習から得た内容を表現し自己評価する」ことである（堀，前掲書，2013年，p.108。）

- 9 二宮衆一「第2章 教育評価の機能」西岡加名恵・石井英真・田中耕治編『新しい教育評価入門―人を育てる評価のために』有斐閣，2016年（第2刷），p.73。
- 10 溝上慎一「第1章 アクティブラーニング論から見たディープ・アクティブラーニング」松下佳代編著『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房，2015年，p.32。
- 11 同上書，p.34。
- 12 西岡加名恵『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法―新たな評価基準の創出に向けて』2007年，図書文化社，p.52。
- 13 堀，前掲書，2013年，p.27。
- 14 松下佳代「序章 ディープ・アクティブラーニングへの誘い」松下，前掲書，2015年，pp.3－5。

